

教授に就任して



歯科総合診療部の 教授に就任して

藤井規孝

この度、平成21年4月1日より医歯学総合病院 歯科総合診療部の部長を拝命致しました藤井です。前任の魚島先生（現・生体歯科補綴学分野教授）はこれまでに何度かこの歯学部ニュースに寄稿しておられましたので、病院組織ですが歯科総合診療部についてご存じの方も少なからずいらっしゃるかと思います。しかしながら、せっかくこのような機会を与えて頂きましたので、自己紹介の後、改めまして歯科総合診療部のご紹介と私が考える今後の展望についてまとめてみようと思います。

まずは自己紹介ですが、私は平成5年に新潟大学歯学部を卒業し、そのまま新潟大学歯学部歯学研究科（大学院）へ進みました。所属講座は当時の歯科補綴学第二講座で、大学院では口腔解剖学第二講座にお世話になり、歯科インプラントに関する組織学的な研究を行いました。他の先生方の例に漏れず、たくさんの貴重な経験をさせて頂いて大学院を修了した後に半年間、学外の病院に勤務させて頂きました。その後、再び大学に戻り、平成16年まで第二補綴で医員、助手を務めました。そして、研修医必修化を2年後に控えたこの年に歯科総合診療部へ異動し、現在に至っております。これまでのことを振り返ってみると、周りにはいつも頼りになる先輩・後輩の先生方や職員の方がいてくれたように思います。このことを考えると今更ながらたくさんの方々に感謝する気持ちでいっぱいになります。ここで、大学院進学を決め、所属講座を選択する際に思ったことについて少し触れさせて頂きたいと思います。最も大きかった

のは、やはり臨床実習のインストラクターの先生方の影響を受けたことでした。当時学生だった私に付き合っただけで夜遅くまでいろいろご指導下さり、相談にのって下さった先生方を見て、自分もいつかそうなりたいと憧れたことを思い出します。臨床実習中の学生にとって、インストラクターと呼ばれる教員の先生方は最も信頼、尊敬することのできる存在だと思います。目の前に患者さまがいらっしゃるという状況で自分がうまくできないことや至らない点をフォローして下さるインストラクターの先生をみてこのような気持ちを抱く学生は今でも決して少なくはないように思います。現在、臨床実習のインストラクターを務めていらっしゃる先生方もこのような先生ばかりであると信じています。

少し脱線気味になってしまいましたが、次に歯科総合診療部の紹介をさせていただきます。当部は上述した学生の臨床実習のマネジメントと歯学部卒業後に研修歯科医の先生方が行う臨床研修の管理・運営・実践を担当しており、臨床教育を専門としている部署です。新潟大学歯学部の臨床実習、臨床研修には学生あるいは研修歯科医が実際に担当医として歯科治療を行う診療参加・実践型で行われているという大きな特徴があります。全国の国公立大学をみても、このような形態で臨床実習、研修を行っている大学は希な部類に入ります。超高齢化や長引く不況など、年々複雑化する社会情勢を受けて、大学病院を受診される患者さまのニーズも段々高くなってきていることが原因の一つであると考えられますが、大学病院を

信頼して受診される患者さまに対して、治療の質を担保しながら学生、研修歯科医の臨床教育にご協力をお願いできる環境が新潟大学歯学部には備わっており、なによりも新潟大学病院を受診される患者さまにご理解があつてこそこのような実習、研修は成り立つものと思っております。また、歯科総合診療部のもう一つの役割として予診業務が挙げられます。予診とは、初めて大学病院を受診された方に対して最初にお話を伺い、お口の中を拝見して大学病院歯科の中にくつもある専門診療科のうち、どの科が治療にふさわしいかを判断（予め診断）する場所です。臨床実習、研修中の学生、研修歯科医もこの予診業務に携わっているため、彼らにとっては何が原因でどのような症状が出現し、その結果患者さまはどのようにお困りなのか？を瞬間的に判断する（絞り込む）ことを学ぶことのできる大変貴重な場であると言い換えることができます。

続いて、今後の歯科総合診療部の在り方、展望について理想も含めて思うところをいくつか書かせて頂きます。

①臨床実習・臨床研修の充実について

歯科医師は理論的に構築されたカリキュラムによって育てられるべきだと思います。しかし、従来から言われている徒弟制度的な要素も必要だと思います。そこに上手な先生がいれば、その先生の真似をすることから技術の習得が始まることも確かにあります。また、これまで知識、技術に対して遅れがちといわれてきた態度の教育は身近に真摯に歯科医療に取り組み、親切で丁寧な先生がいることが最も勉強になるのかもしれない。さらに、学生や研修歯科医自身が担当医の一人あるいは担当医として直接患者さまに向き合うことが実習、研修修了後の彼らに大きく影響すると思います。もう一つ付け加えると実際に担当医として患者さまと対面した時には、予診業務の紹介の行で触れたように、何が原因で根本的に問題を解決するためにはどこを治さなければならないのか？を常に意識する必要が生じます。何事についても同じですが、ほとんどすべての現象には必ず原因と結果があり、原因と結果の間にはなんらかの因果関係が成立するという考え方に大きな間違

いがないのであれば、これを歯科治療に当てはめ、原因を探る習慣を身につけることが臨床実習、研修の大きな目的ではないだろうかと思っております。さらに、このような姿勢は歯科医師のみならず大学に歯科学に関連する研究者や教育者にとっても必須であり、良質な歯科医師だけではなく、優秀な研究者や熱心な教育者を輩出することを求められる歯学部にとって欠かすことのできない大変重要なものであると考えています。

現在、新潟大学歯学部では幸いにも非常に貴重な臨床実習、臨床研修を行うことができしております。しかし、今後もよりよいシステムを模索し、学生、研修歯科医、患者さますべての見地に立って改善する努力を続けることが必要であり、臨床教育を通じて上記の目的を達成することが歯科総合診療部に課せられた命題の一つであると考えております。

②研究について

現在、歯科医師臨床研修が必修化されてから4年目に入っています。歯科における臨床教育に関しては様々な学会やセミナー等で報告、検討され、各大学ともよりよい臨床教育システムの開発に取り組んでいるようです。新潟大学歯学部には、診療参加・実践型という現状において簡単に他大学が真似ることのできない体制が確立されつつあり、これまでも何度か本学の臨床教育の現状を報告してきました。今後もこれに胡座をかくことなく現在のシステムをさらに発展させ、それらを逐次報告していくことができると考えております。臨床教育に関する研究はそれぞれの機関がさまざまな体制で行っているため、統一的な見解を求めることは難しいかもしれません。しかし、質の高い歯科医師を育成するという目的はどこも同じはずで、効果的な臨床教育方法について他大学の先生方との情報交換等を積極的に行い、参考になる点があれば新潟大学がこれまで培ってきた臨床教育方法に取り込むような柔軟性も持ち合わせていたいと思います。

最後になりますが、歯科総合診療部の学内・院内での業務は他分野や診療部の先生方のお力添え無くしては成り立ち得ません。また、先に申しあげましたように歯科総合診療部は病院に属する組

織であり、その歴史も比較的浅い部類に入ります。さらには、私自身まだまだ勉強しなければならないことが山積しており、至らない点が多々あることも十分承知しているつもりです。これらのことをしっかり念頭において、今後学内の先生方、職

員の方々、また各方面関係者の方々にご指導頂きながら、少しでも新潟大学歯学部の方力になれるようがんばって行きたいと考えております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



口腔生理学分野の 教授に就任して

医歯学系・教授
(口腔生理学分野) 山 村 健 介

1. はじめに

このたび、平成21年4月1日付けで、現新潟大学副学長である山田好秋先生の後任として、口腔生理学分野の教授に就任しました山村健介と申します。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

私は平成2年3月に20期生として新潟大学歯学部を卒業し、大学院生として当時の口腔生理学講座（現口腔生理学分野）に入学しました。大学院時代の研究テーマは「歯根膜入力呼吸活動に及ぼす影響について」というもので、入学当時口腔生理学講座の教授であられた島田久八郎先生、島田先生ご退官後、教授として赴任された山田好秋先生のご指導のもと平成6年に大学院を修了しました。大学院修了後も山田先生に研究を続ける機会を与えていただき、平成6年から1年間を研究生、平成7年～18年は助手、平成18年～21年は助教授（現准教授）、そして現在とずっと新潟大学口腔生理学分野のお世話になり続けています。その間スタッフが少ない中、山田先生に後押ししていただき、平成9年～平成11年の2年間と平成12～13年の2ヶ月間、カナダ・トロント大学口腔生理学講座のBarry Sessle先生の研究室で「咀嚼運動制御における大脳皮質の役割」に関する研究をさせていただきました。これまで良き師、良き先輩、良き仲間恵まれ、教育・研究の両面において、私自身の能力と言うよりは、多くの人に支えられ、励まされ、啓発されてきたから現在があるのかな、と思っています。

今回は「教授に就任して」というタイトルでの原稿依頼ですので、教育・研究についてのこれからの抱負を書きたいと思ひます。

2. 教育

生理学は、身体のもつさまざまな機能の法則や意義、全身の機能との関連を明らかにする学問です。私なりの解釈では、全ての生物に共通な「生きるしくみ」の基本原則をふまえた上で、もっと具体的な個々の生命現象についてその基本原則をあてはめて、共通性と特殊性を探るような学問だと思っています。そこには個体の構成要素である個々の細胞を見つめるミクロ的な視点と、個体全体を包括的に捉えるマクロ的な視点の両方が必要です。生理学を学ぶことによって生命現象を観察する上での「ある種の哲学」あるいは「基本的なひな型」が得ることができます。すなわち、何か新しい現象と出会ったときに、その現象を分析・評価する目が養われます。このような能力は、患者さんの病態を理解し、生物学的な知識をもって包括的かつ先進的な歯科医療を提供できる歯科医師を育成する上で不可欠であると考えています。

生理学の教育では細かな知識をつめこむのではなく、生理学の基本となる内容を臨床歯科医学や他の基礎学問領域とどのように関連しているかを含めて具体的にわかりやすく学生に伝えることを心がけたいと思っています。そして、学生が講義によって得た知識を活用しながら自ら考え、仲間議論し、他者に伝えるような問題解決型の学習の場を設けたいと思ひます。これにより歯科医師に不可欠な「患者さんが納得できる説明をする能力」「他人とコミュニケーションをとる能力」を養うことができると考えています。同時に、歯科医学や生命科学には、未解決の学問的課題が多く残っていること、社会に貢献するような医学の発展は、基礎、臨床を問わず地道な研究活動に支え

られていることを学生さんに伝え、リサーチマインドをもった学生さんを育成できればと考えています。そのためには、私自身が積極的に学生に接し、教育や研究を楽しみ、これらに熱意をもって臨んでいる姿勢を学生に見せ続けることが何よりも大切であると思っています。大学院生には私の持っている生理学的な知識、技術だけではなく、社会あるいは学術的に価値が高く、妥当かつ検証可能で、焦点のしぼれた仮説を作ることの重要性を伝えることができればと考えています。このためには、自分自身の研究の質を高めることが、教育内容の向上につながることを肝に銘じていきたいと思っています。

3. 研究

近年の分子・細胞生物学研究分野の進歩は目覚ましく、これまで未知であった口腔に関連する機能分子が次々と同定されていますが、それらの知見を口腔機能、ひいては生命活動へと統合する役割を果たすのが口腔生理学であり、今後微視的・分子論的研究が進歩すればするほど、これらを統合し生体を有機的に捉える研究が重要になってくると考えています。同時に研究によって得られた知見を社会に還元する姿勢も今後基礎研究をする者に課せられた使命であると思っています。

私自身がこれまで行ってきた覚醒動物を用いた実験系に加え、最近私たちの教室で開発したヒトを用いた咽喉頭領域の電気刺激による嚥下誘発の実験系を用いて、咀嚼・嚥下運動の神経制御機構の解明を目指した研究をさらに推し進めていこうと考えています。具体的には以下の通りです。

1) 覚醒動物を用いた咀嚼・嚥下運動の神経制御機構の解明

咀嚼・嚥下運動は消化・吸収の第一段階で、取り込んだ食物を機械的に粉砕することに加え、食塊を消化液（唾液）と混和し、次の器官での消化・吸収に適した性状にした上で移送するという複数の作業が連続性をもって行われる運動です。この機能は自律神経系により不随意的に制御される食道以降の消化管で行われる消化・吸収過程と本質的に同一ではありませんが、その制御が体性神経系によって行われること、そこに随意的な制御が加

わることが大きな特徴です。私たちが現在行っている覚醒動物を用いた実験系を用いて咀嚼・嚥下の神経機構の研究を行っている研究室は世界的にも少ないため、その利点を生かし、麻酔下の咀嚼モデル動物では研究が難しい口腔内での食物の移送機能の制御メカニズムと、大脳皮質をはじめとした高位脳による随意的制御がどのように関与しているかの解明に重点を置きたいと考えています。

2) ヒトを用いた嚥下誘発の神経制御機構の解明と社会への還元

嚥下機能障害をもつ患者さんの増加が社会的な問題となっている今、私たち基礎研究者も社会に早い段階で還元できる研究をすべきだと考えています。現在、ヒトを用いて嚥下反射の促進因子・抑制因子の解明、例えば意識レベルが反射に及ぼす影響や、味覚刺激など口腔への刺激が反射に及ぼす影響などを味の素との共同研究で調べています。寝たきり高齢者の嚥下機能障害が社会問題となっていますが、意識レベルと嚥下反射の関連や味覚など末梢入力による嚥下誘発の促進・抑制のメカニズムが明らかになれば、嚥下機能リハビリの手技や嚥下補助食品の開発・改善に寄与すると考えています。

3) 咀嚼・嚥下感覚の認知機構

「食べる幸せ」は、個体が「摂取した食物を好ましいと判断し、プランした通り円滑に咀嚼・嚥下運動が遂行されたことを認知できた」ときに感じるというのが私の仮説です。この認知過程では感覚情報処理、運動のプランニング、個体それぞれの持つ記憶などに関わる脳部位で情報が双方向的にやりとりされます。このメカニズムを明らかにするには、大脳皮質活動を俯瞰的に捉える手法が必要となりますが、f-NIRS（近赤外光トポグラフィ）は有力な方法だと考えています。「食べる幸せ」を感じるメカニズムを解明し、社会に発信することが私の夢です。

4. 終わりに

先にも書きましたが、私自身は多くの人と出会い、その人たちとのコミュニケーションを通じて多くのことを学び、その人たちに支えられ、励ま

されて成長したタイプの人間です。これからも人との出会いを大切に、少しでも成長し、本学、そして社会に貢献できたらと考えています。たくさ

んの出会いの場とすべく口腔生理学分野の扉はいつも広く開けておくつもりです。今後ともよろしくお願い申し上げます。